「知と癒しの医」を創造する　医科歯科大

Bloom!

MARCH 2023

no.32

《特集01》

Develop "Convergence Science" through Cooperation and Collaboration

東京工業大学との統合 ～未来を切り拓く～

《特集02》

指定国立大学法人START

《特集03》

ダイバーシティ＆インクルージョンで自分らしく輝く

国立大学法人
東京医科歯科大学
TOKYO MEDICAL AND DENTAL UNIVERSITY

発行：国立大学法人 東京医科歯科大学
〒113-8510　東京都文京区湯島 1-5-45
編集：国立大学法人 東京医科歯科大学
総務部総務秘書課広報係
E-Mail：kouhou.adm@tmd.ac.jp
制作協力：株式会社アイガー
©国立大学法人 東京医科歯科大学
本誌記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。

www.tmd.ac.jp/ ▸▸▸

〈編集後記〉

本学は、2024年度中をめどとして東京工業大学と統合し、1法人1大学となります。今号、特集01では、本学田中学長と東京工業大学益学長に、統合を決めた理由や、統合後の展望に至るまで広くお話を伺いました。他に類を見ない指定国立大学法人同士の統合に向けた課題、そして両大学一丸となって未来を切り拓いていく新しい大学の実現に向けた将来像を理解していただければ幸いです。他にも、特集02では、2022年度から指定国立大学法人として動きだした本学の取り組みの紹介、特集03では、本学が推進しているダイバーシティ＆インクルージョンの取り組みについても紹介しております。「Bloom! 医科歯科大」は、今後とも発展を続ける本学について発信してまいります。

Bloom!
MARCH 2023
no.32

CONTENTS

INTERVIEW …… 03

《特集 01》
Develop "Convergence Science" through Cooperation and Collaboration
東京工業大学との統合 ～未来を切り拓く～ …… 04

《特集 02》
指定国立大学法人 START
トータル・ヘルスケアの実現に向けて …… 10

Breakthrough　次世代の開拓者 …… 14

《特集 03》
Let's advance your Life & Career!
ダイバーシティ & インクルージョンで自分らしく輝く …… 18

Graduate & Student『この場所から、新しい未来へ』 …… 20

TMDU EYES …… 22

東京医科歯科大学基金　寄附者芳名録 …… 23

The J. Donald Gass Medalは、黄斑疾患を初めて報告した眼科医であるJohn Donald MacIntyre Gass氏の名前を冠した賞で、第45回年会で記念のメダルを授与されました。

INTERVIEW

病的近視の研究が評価され世界的に権威ある賞を受賞

眼科学分野
教授 大野（おおの） 京子（きょうこ）

失明の可能性がある病的近視の原因から結果までを解明

2022年6月、米国黄斑会議のThe J. Donald Gass Medalを受賞いたしました。この賞は毎年、世界でただ一人、網膜疾患に対する顕著な業績を挙げた者に授与されるものです。このような世界的な賞の対象に選出していただいたことに感謝し、大きな励みにもなりました。

本学眼科には、国内外で非常に著名な、他を圧倒する領域があります。その一つが、近視の中でも失明に至る可能性がある病的近視です。私はこれまで約30年間、網膜にどのような病変が生じると失明につながるのかを研究してきました。従来は漠然とアジア人の奇病のように思われていた病的近視を、3DMRIや超広角OCTといった検査機器を用い、原因から結果に至るまで解明したことが今回の受賞につながったのだと思っています。

国内外で活躍する人材を育成し本学の存在感をさらに高めたい

近視はとても身近な病気で、2050年頃までには世界の人口の約半数が近視になると試算されています。ところが病的近視になると、眼球の後ろ側が突出していびつな形になる「ぶどう腫」といった変化が見られます。実は、そうした現象は幼少期から起こることが分かっており、現在、AMEDや製薬会社と共同で眼球変形を防ぐ治療に取り組んでいるところです。また基礎分野では、本人の皮膚の線維芽細胞を採取し、眼球の後ろに注入してコラーゲンを作り、強膜を分厚くすることで変形させないようにする研究も行っています。

今後は、国内外で活躍する人材を一人でも多く育成し、本学のプレゼンスをさらに高めていきたいと考えています。海外の研究者との豊富なネットワークを生かし、人柄や教育・研究面において信頼できる人たちを厳選し、レジデントなど若いときから積極的に留学してもらっています。その一方で、私自身は疾患の本質を突き止め、患者さんを救うための診断法、治療法を確立するという目的に向けて常に前進していきたいと思います。

この仕事に終わりはありません。これからも、グローバルな研究をさらに展開していきたいと思います。

2023年1月19日新大学名称を
大学設置・学校法人審議会へ提出決定！

東京科学大学（仮称）

Develop "Convergence Science" through Cooperation and Collaboration

東京医科歯科大学と東京工業大学は２０２４年度をめどに統合し、新しい一つの大学になることで基本合意しました。世界水準の教育研究を展開する指定国立大学法人同士の統合は初めてです。統合の背景や狙い、今後の課題や展望について、本学の田中雄二郎学長と東工大の益一哉学長に語っていただきました。

対談実施日：2022年12月8日

東京医科歯科大学 学長
田中 雄二郎
Yujiro Tanaka

東京工業大学 学長
益 一哉
Kazuya Masu

既存の組織に縛られることなく失敗を恐れず挑戦できる環境に

田中　本学は、もともと歯科医師、次に医師を育てる学校として始まり、今日まで教育・研究に一生懸命取り組んできました。しかし、良い医療を行おうとして頑張れば頑張るほど、歯学、医学の領域を超える部分が必要になり、それを解決するのが工学でした。また、コロナ対応を機に、まずは社会ありきの大学であるべきだという認識が学内で共有されました。そのため、我々が社会に一層貢献していくためには工学との連携が不可欠だと思い、益学長に声をおかけした次第です。

益　最初にお話を頂いたときは、正直言って「そういう考え方もあるのか」程度の印象でした。その理由は、本学の設立理念は、工業工場があって工業学校を興すのではなく、工業学校をつくり、人材を育てることによって工業工場を興すことにあります。しかし、ここ30年余り、我々は本当にその理念にのっとって社会に貢献しているのかという強い危機感を抱いてきました。ですから、当初は理工系の総合大学としては、医科歯科大との連携よりも先にするべきことがあるのではないかと思ったわけです。

田中　両大学とも指定国立大学法人ですから、国際的な競争環境の中で世界最高水準の教育活動を展開し、ひいては社会の成長とイノベーションの創出に貢献することが期待されていると認識しています。したがって、この役割を踏まえて二つの大学が統合すれば、組織、研究、教育の融合が進み、医工連携による新たな教育研究や人材創出などが容易になると我々は考えました。統合形式として、一法人二大学よりも一法人一大学の方が将来の可能性が広がると提案されたのは益学長だったと思います。

益　田中学長といろいろなお話をしている中で、お互いに学知の創造はもちろん、新たな産業や社会を創出するという同じ志を持っていることが分かりました。本学の設立の原点である視点に共通点を感じたのが、一法人一大学を目指そうと思った大きな理由です。また、一から新大学を構築することによって、既存の組織に縛られず、失敗を恐れずチャレンジできる環境をつくることが可能になると思えたのも理由の一つです。

両大学の文化の違いを超えて より良いものを作りあげる

田中　両大学の統合の目的は、双方のこれまでの伝統と先進性を生かしながら、どの大学も成し得なかった新しい大学のあり方を創出することです。昨年、統合協議を公式にスタートして以来、学内で質問や意見を募集すると100件以上集まったのですが、おおむねポジティブでした。学生の中には、せっかく憧れの大学に入学したのに、卒業証書の大学名が変わってしまうのは寂しいと感じている人もいるようですが、大学がなくなるわけではないので、むしろ発展するという前向きな捉え方をしてくれる人の方が多いようです。医学や歯学に工学が連携すれば学問の幅が広がりますし、例えば、診療現場で用いるロボットなどの医療機器が進化したり、自分たちの大学で作れるようになったりするのは、とても刺激的なことですからね。

益　本学の学生にも、両大学の文化の違いをどう乗り越えようとか、医工連携になると医師の言うことに応じなければいけなくなるのかといった心配事があります。しかし、医工連携によってオーバーラップする部分もあり、今以上に良いものが作れるようになるわけですから、もっと高い視座で議論をしようと私は常に言ってきました。既存の学問領域にとどまらず、人に直接関わる医学や歯学も取り入れて、社会実装につながる取り組みを展開していくのは、非常に有意義なことです。ですから、名誉教授や卒業生の人たちからも「前向きに進めてほしい」という意見をもらっています。

複数の学問が融合した総合知で 世界的課題の解決を目指す

田中　両大学は、統合の狙いの一つとして、複数の学問を融合した「コンバージェンス・サイエンス」の概念を掲げています。このことについては、どのようなお考えをお持ちですか。

益　部局などを超えて連携協働できることに大きな意義を感じています。歴史的に見ても、20世紀中盤は物理学と工学を融合した物理工学によって原子力やインターネットなどの技術革新が進み、現在は工学と生物学が融合した生命工学による生命機械が未来を支えています。このような展開を考えると、今後の50年間は理工学、医歯学、情報学、人文社会科学などを融合した「総合知」が、脱炭素や人々のウェルビーイングといった世界的な課題の解決につながると感じています。本学としては、リベラルアーツもきちんと理解した上で社会の課題を自ら発見し、解決できるような、幅広い知見を備えた人材の育成を目指しています。

田中　私も、統合によってさまざまな課題に対応するコンバージェンス・サイエンスが実現することを期待しています。そうでなければ統合の意味がありません。例えば、本学の医療現場にいる人たちのニーズを大学で昇華させて、東工大の方々の技術と連携させることができれば、かなりいろいろなことが進むと思います。また、さらにその研究結果を医療現場にフィードバックすることによって、社会実装につながるシステムも構築できると考えています。

益　技術連携のことで言うと、本学出身の研究者が医科歯科大の生体材料工学研究所で歯の接着材を開発し、医科歯科大の歯科医師がそれを世界中に広めたという歴史があります。そして現在も、医科歯科大、東工大、静岡大、広島大の4大学は文科省の共同研究拠点としてさまざまな研究を進めています。本学が作った電子デバイスを用いた医療用機器もありますし、統合によってさらに情報共有が深まれば、今まで以上の成果が生まれると確信しています。

研究者・学生が交流できる 風通しの良い環境の整備を

田中　東工大の学生さんの中には、統合の話をオープンにした段階で既に本学の学生にコンタクトを取りたいと言ってくださる人がいると聞いています。今後も、そうした交流が進むことを期待しています。統合の移行期間については2027年度までとしていますが、2024年度の統合時点で入試制度や学部組織を変更できるとは考えていません。ただ、せっかく一つの大学になるのですから、両大学の新入生が一緒に学べる場をつくるとか、あるいは共通の単位を取り合えるようにはしたいと思います。また、実習や卒業研究でお互いが乗り入れられる環境も早く整えていきたいと考えています。

益　統合しても、初めのうちは壁があるのが自然なことだと思っています。本学も、以前はコンクリートのように厚い縦割りの壁があったのですが、2016年度に大規模な組織改革を行ってからは、いつの間にかアクリルのような薄い壁になり、次第にドライバーですぐ穴が開くようになって組織内の風通しが良くなりました。ですから、今回の統合においても、お互いを隔てる壁に風穴を開けるような意識を持ちたいと思っています。

両大学のミッションのつながりが 社会貢献の鍵に

益　医科歯科大のミッションにある「知と癒しの匠を創造する」という表現は、技術者である我々の心にとても響きます。本学は、明治の殖産興業と昭和の日本の高度成長を技術で支えてきました。ですから、〝技術を究める〟ということに大きな自負心があります。実は、明治時代の本学は繊維産業や窯業に強く、焼き物の分野では人間国宝の濱田庄司や島岡達三などの著名な作家が数多く生まれています。中国から来た

留学生が本学で勉強して故郷に戻り、焼き物で有名な景徳鎮陶磁大学の学長になった例もあるほどです。そのように、技術を究めることが美しいものを創り出す〝匠〟の心につながっており、それも自己満足ではなく、社会のためになっているのが本学の特長だと思います。

田中　何かを究めたい人がたくさんいるのは、とても素晴らしいことですね。そのようなマインドを持った方々が社会で活躍されているからこそ、東工大には高い存在価値があるのだと思います。

対面での相互作用があってこそ新たなものが生まれてくる

田中　日本では医学部のある大学には必ず病院が併設されていて、本学には医学と医療の二つの部分があります。東工大の方々はそのことを理解して、医学だけでなく医療にも関心を持たれているのでしょうか。

益　まだ理解しているとは言えないかもしれません。ただし、例えば建物を建てるときに新しい材料や工法を工学的なセンスで考えるように、最先端の医療についても自分たちで何か提案してみようという気持ちが生まれているのは確かです。

田中　そうしたポジティブな部分の積み重ねが、全体のムードを変えていくのでしょうね。

益　その通りだと思います。よく言われることですが、多様な人々が集まり相互作用の多い組織ほど新しいものが生まれます。昔はお茶を飲みながらアイデアを出し合うようなことがよくありましたが、今はインターネットが発達して、そうした機会が減っています。でも、やはりFACE TO FACEの交流は大事で、そこから満足や幸福といったものが生まれてくるのだと思います。そのためにも、新しい大学には意識的に研究者や学生が交流できる場を設けて、いつの間にか交わることが当たり前になって新しいものが生まれてくるような環境をつくりたいと思います。

田中　フラットで自由な人間関係のもとで両大学の尖った研究を生かしつつ、研究者自身が興味に根ざした活動のできる〝自由闊達〟な環境を構築したいと思います。

益　そういえば、医科歯科大の初代学長は「歯科を極めるためには右手に医学、左手に理工学が必要だ」とおっしゃっていますよね。その言葉を知ったとき、えも言われぬ縁を感じました。改めて医科歯科大との統合に運命に似たものを感じています。

田中　ありがとうございます。新大学の設立に向けて、これからもよろしくお願いいたします。

History ～両大学の歩み～

● 東京医科歯科大学	● 東京工業大学
1928年　10月 東京高等歯科医学校設立（一ツ橋）	1881年　5月 東京職工学校設立
1930年　12月 東京高等歯科医学校湯島（東京女子高等師範学校跡地）に移転	1890年　3月 東京工業学校に改称
1944年　4月 東京医学歯学専門学校となり医学科を設置	1901年　5月 東京高等工業学校に改称
1946年　8月 東京医科歯科大学（旧制）設立	1929年　4月 東京工業大学（旧制）へ昇格
1949年　6月 医学部、歯学部附属医院が医学部、歯学部附属病院にそれぞれ改称	1954年　4月 建築材料研究所、資源化学研究所、精密工学研究所、窯業研究所を整備
1951年　4月 国立学校設置法により東京医科歯科大学（新制）設立 医学部医学科、歯学部歯学科を設置	1990年　6月 生命理工学部設置
1955年　4月 大学院医学研究科、大学院歯学研究科を設置	2004年　4月 国立大学法人東京工業大学設置
2004年　4月 国立大学法人東京医科歯科大学設置	2016年　4月 教育研究改革により学院制へ移行
2020年　10月 指定国立大学法人に指定	2018年　3月 指定国立大学法人に指定
2021年　10月 医学部附属病院と歯学部附属病院が一体化し、東京医科歯科大学病院になる	2021年　創立 140 周年

指定国立大学法人 START

東京医科歯科大学は「世代を超えて地球・人類の『トータル・ヘルスケア』を実現する」という目標を掲げ、2022年度から指定国立大学法人として大きく動きだしました。本学が目指している「研究力強化」「人材育成・獲得」「国際協働の推進」「社会との連携」「財政基盤強化」「ガバナンス強化」に向けて取り組んでいる、若手研究者支援制度、重点研究領域の設置、若手研究者の育成スキームの構築、海外とのネットワークの拡充、産官学連携の推進について、古川哲史理事ら4名に、座談会形式で語っていただきました。

指定国立大学法人としての取り組みはこちらをチェック!

消化器病態学分野 教授／
創生医学コンソーシアム
消化器創生ユニット ユニット長
岡本（おかもと） 隆一（りゅういち）
産官学民の連携強化を主に担当

副理事（目標・評価担当）
渡部（わたべ） 徹郎（てつろう）
人材の育成・獲得および国際協働の推進を主に担当

理事・副学長（研究・改革担当）
古川（ふるかわ） 哲史（てつし）
指定国立大学法人構想の担当理事として全体をまとめる

執行役・副学長（情報・国際交流担当）
森尾（もりお） 友宏（ともひろ）
研究力強化および国際協働の推進を主に担当

多様な立場の研究者を支える本学独自の若手研究者支援制度

古川　本学では、以前から国の支援のもと「TMDU卓越大学院生制度（Ⅰ）（Ⅱ）」として優秀な大学院博士課程学生を対象にTMDU卓越大学院生を選抜し、支援を提供してきました。しかし、医師免許を持っている研究者の応募が少なかったため、今年度より新たに取り入れたのが、本学独自のクリニシャン・サイエンティスト（以降CS）養成支援制度です。大学卒業後に研修医などで臨床を経験することで学生時代に持っていた基礎研究への熱意が薄れたり、経済的な理由から大学院に戻ることを諦めたりする学生を支援し、臨床の視点に立って基礎研究を行う研究者を増やすことが目的です。これらの制度について、先生方はいかがお考えですか？

森尾　今年度は、臨床系の人の応募が少なかったのですが、今後、採用された人の実績によって、制度が浸透していくのではないかと考えています。その結果、新たな要望が出ればさらに付加していく形をとっていきたいですね。

岡本　基礎研究を志す学生にとって、大変有用な制度だと思います。私の研究室から選ばれた桐野桜さんは、採択学生の一人としてコメントを寄せてくれていますが、非常に研究意欲の高い学生です。大学卒業後に研修医として臨床研究を経て、大学院に戻り基礎研究に打ち込むという、CS養成支援制度に理想的なキャリアを積んでいます。また、桐野さんの場合は現在、子育てをしながら研究活動を続けています。支援制度があることで、さまざまな学生がライフステージに合わせたキャリア形成を実現できるのではないでしょうか。

古川　CS7名の選考にあたり、ヒアリングを行ったのですが、桐野さんをはじめ想定以上のレベルの大学院生が集まったという手応えを感じています。

渡部　経済的な支援だけでない点も重要だと思います。YISC（Young Investigator Support Center：若手研究者支援センター）で本学の教育コンテンツを生かしたセミナーなどが増えていますし、卓越大学院生同士が交流できる利点もあります。この制度によって、本学の大学院生全体の底上げが期待できます。今後はこの制度によって海外との交流が活発になることを楽しみにしています。

3つの重点研究領域展開で進む若手研究者育成と異分野融合

岡本　今年度からの新たな取り組みとして、「創生医学」「希少疾患・難病」「口腔科学」という3つの重点研究領域の設置もありますね。私は「創生医学」の領域での参加ですが、重点研究領域の設置によって、大学の目指す方向性が明確になったことを強く感じています。

古川　重点研究領域導入のコンセプトは主に2点、若手の育成と異分野との融合です。世界でトップジャーナルに掲載された1万7000論文の多くは異分野が融合した研究成果であるなど、イノベーションには異分野融合が欠かせません。そのため、重点研究領域の研究者の選定にあたり、ボトムアップの公募研究者には若手を優先し、トップダウンの指定研究者には異分野の人を入れていただくようにしています。

森尾　合同シンポジウムなども開催されましたが活況でした。本学はもともと「難病」に強く、難治疾患研究所があり、病院には稀少疾患先端医療センターなども備えています。データサイエンス系人材の参加など、横軸に展開しやすい領域ですので、領域内、領域間での連携を進めていきたいと思っています。

渡部　私が参加する「口腔科学」は、歯学、医学のほか工学とも親和性が高く、重点

研究領域となったことで、異分野融合が進み、今までできなかった研究にも着手しています。

学部生から研究者へとつなぐシームレスな支援体制の確立

古川 重点研究領域のコンセプトにもありましたが、本学が次のステップに進むために欠かせないのが、若手研究者の育成です。学部生から大学院生、ポスドク、PI（Principal Investigator：研究主宰者）へのシームレスな育成のための取り組みが、次世代研究者育成ユニットやテニュアトラック教員の採用、そして、YISCの設置です。

以前から、学部生には研究実践プログラムなど4つのサポートがあり、大学院生については前述の卓越大学院制度がありました。その後の段階として科研費がとれる前の研究の初心者を対象に、重点研究領域の公募があります。次にある程度力のついた研究者を支援するのが、次世代研究者育成ユニットの採用です。さらに、PIになるまでをつなぐのがテニュアトラック制度になります。今年度はテニュアトラック制度後に独立した教授職を与えるという道筋を明確にしたところ、多くの応募があり、40倍強の倍率の中、塩飽裕紀先生と楠山譲二先生の2名が採用されました。※

森尾 非常に優秀な研究者が応募してくれているので、今後TMDUテニュアトラックというのが、一つのブランドになるといいなと思っています。

岡本 YISCという具体的な組織ができたことで、学生が独立した研究者になるためのノウハウや大学の育成経験の蓄積を、引き継ぐ仕組みができたことは大きな意味がありますね。

渡部 今後は、本学で卓越大学院生として活躍した後に独立ポジションを獲得する過程において、一度海外に留学して広い視野を身につける機会が若手研究者育成の取り組みに加わっても良いと思います。

海外とのネットワークを拡充する教育コンテンツづくり

森尾 本学では、グローバルフェロー制度と短中期海外滞在助成金制度が始まりました。グローバルフェロー制度は世界の第一線で活躍する研究者の方に本学の教育に加わっていただく取り組みで、ブリティッシュ・コロンビア大学のヨセフ・ペニンジャー教授にご担当いただきます。オンラインで学部生への講義のほか、大学院生への指導を行っていただく予定です。短中期海外滞在助成金制度は、ポスドクからの帰国後など海外で追加の研究を行いたい場合などに、渡航費や滞在費を支援する制度です。

一方、海外に向けての教育コンテンツなどの発信を行うのが国際医歯学教育センターです。国際的な技術水準向上を目的とし、アジア圏を基軸とした海外展開を計画しています。なかでも、大学院留学生向けの実習科目であるEECD（Essential Expertise for Clinical Dentistry）は2015年度から歯学部で取り組んできました。今後はデジタル教材としても展開ができればと考えています。

※テニュアトラック制度とは…准教授相当または講師相当として本学で研究を行い、審査に合格することで教授職として活躍が可能となる制度。

渡部 EECDは本学で学んだ留学生が、帰国後に再度高い技術を学ぶために利用されています。国際的な教育レベルを高めると同時に、本学の評判を広げていくことも一つの目的です。今後は歯学だけでなく医学の教育コンテンツをグローバルに展開することで、世界をリードしていきたいと思っています。

開かれた環境から生まれる新たな産官学連携の可能性

渡部 TIP（TMDU Innovation Park）は、本学を中心としたアカデミアと、多様な業種の企業・スタートアップや行政との産官学でイノベーションを目指すコミュニティです。スタートアップ企業が本学の設備を使って研究を進めるなど、オープンラボとしても機能しています。

森尾 これまでの産学連携では、一つの研究室と企業とのお付き合いが主体でした。TIPのような開かれた場で企業や行政と連携していくことで、多くの可能性が生まれると思います。

古川 今の学生や大学院生は、スタートアップのマインドを持っているように感じます。今、世界の中心となっているGAFAなどはスタートアップ企業です。日本はこの30年ほど、世界に通用するスタートアップ企業は生まれていません。ヘルスケアはスタートアップ企業が飛躍する可能性の高い分野です。ぜひTIPから、日本の産業構造を変えるようなスタートアップが生まれてほしいですね。

岡本 世の中の多くの医療系企業は、健康医療で社会を変えていくことを基盤としていると思います。TIPを通して、学生たちには、社会に貢献する志を育てていってほしいですね。

古川 日本の中心地にある本学は、イノベーションが生まれる場として、世界をつなぐ役割を果たすことができます。国内外の研究者や企業を結ぶハブであると同時に、本学で学んだ若い研究者たちが、外の世界で学び、また戻ってきてくれるような大学でありたいと願っています。

About Clinician Scientist (CS)

クリニシャン・サイエンティストとは

TMDU卓越大学院生

挑戦的・融合的な研究に専念できる研究環境と多様なキャリアパス形成に向けた支援を提供

TMDU卓越大学院生制度（Ⅰ）
1学年6名（3学年18名）、支給期間：3ヵ年
研究専念支援金：月16万円、年間192万円
研究費：50万円

TMDU卓越大学院生制度（Ⅱ）
1学年30名（4学年120名）、支給期間：4ヵ年
研究専念支援金：月16万円、年間192万円
研究費：50万円

優秀な学生を選出

クリニシャン・サイエンティスト

「職業としての大学院」をコンセプトとし上記に加えて以下を支援

CS養成支援制度
1学年8名（4学年32名）
支給期間：4ヵ年
- CS養成支援金：年間250万円
- 授業料免除：年間53万円

詳しくはこちら

STUDENTS' VOICE

臨床教室の大学院生は多忙です。研究者として、医師として、家族の一員としてさまざまな立場で重要な役割を担っています。有限の時間の中で、研究に充てる時間をより長く確保したいと考えCS養成支援制度に応募しました。支援により研究時間を確保することができます。支援を励みに研究力を高め、これまでの臨床経験も生かして人類・社会への貢献というゴールを見据えたCSを目指していきたいと考えています。

消化器病態学分野大学院1年　桐野 桜さん

CS養成支援制度で採用いただき、自身の大学院生活が職業のような扱いに変わりました。安心のできる収入を得ることが可能となり、より本格的な研究活動に集中することができるようになったと実感しております。今後は、研究者として備えるべき技術や知識基盤を獲得し、研究と臨床を橋渡しできる存在に成長していきたいと考えております。また、“口腔から全身を診る”という口腔制御による先制医療の確立に貢献する研究活動を行っていきたいです。

歯周病学分野大学院1年　今井 千尋さん

Breakthrough
次世代の開拓者

難治性の統合失調症に対する病態解明と治療法の開発に取り組む

大学院医歯学総合研究科
精神行動医科学分野
テニュアトラック准教授
塩飽 裕紀

しわく・ひろき
東京医科歯科大学難治疾患研究所神経病理学分野所属、東京都立多摩総合医療センター精神神経科所属、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科精神行動医科学分野助教などを経て2022年より現職。

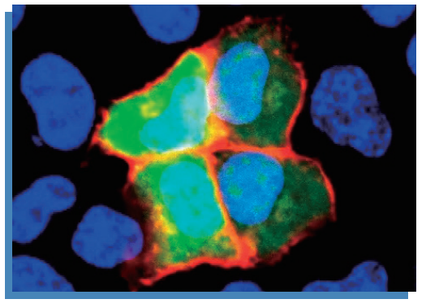
統合失調症患者にシナプスを障害する自己抗体が存在することを発見

統合失調症は、幻覚・妄想などの陽性症状、うつや感情の平板化などの陰性症状、認知機能の低下などを呈し、約100人に一人が発症する比較的頻度の高い精神疾患である。しかし、原因は明らかになっておらず、現在の治療薬では十分に治療効果が得られないケースも少なくない。この疾患の病態解明と治療法の開発に取り組んでいるのが、精神行動医科学分野の塩飽裕紀テニュアトラック准教授だ。

「統合失調症とひと口に言っても、さまざまな病態背景を持つ人がいるとされています。現在の治療薬はドパミン仮説に基づいた治療薬で、十分な効果が得られない症状や患者さんのためには、それ以外の病態を明らかにする必要があります。そこで我々が注目したのはシナプス分子に対する自己抗体です。近年、脳炎患者さんから新しいシナプス分子に対する自己抗体が発見されてきています。脳炎に至らないまでも、神経症状や精神症状を呈する場合も報告され、統合失調症の患者さんでも、そのような未知の自己抗体があれば、精神症状につながるのではないかと考えました」

塩飽テニュアトラック准教授は単に自己抗体を見つけるだけではなく、その自己抗体が病態に関連すると証明できる確率を上げる工夫をしたスクリーニング系を構築した。その結果、統合失調症の約5%の患者の血清・髄液中に、脳炎でも報告のない、シナプス分子NCAM1に対する新規自己抗体を発見した。さらに、患者さんから精製した抗NCAM1抗体をマウスに投与したところ、NCAM1を介したシグナル伝達を阻害し、シナプスの減少や統合失調症関連行動につながることを示した。

「これらの結果から、抗NCAM1抗体は除去すべき治療ターゲットになる可能性が考えられます。そのような臨床研究をすることで、どの程度これらの自己抗体が統合失調症の症状に寄与しているか明らかになるとともに、その方法は新しい治療戦略として提案できる可能性があります。さらに、抗NCAM1抗体は約5%の患者さんに陽性でしたが、他の新規自己抗体も見つけていて、当初想定したよりも大きい割合で、自己抗体が統合失調症に関連している可能性が明らかになりつつあります」



抗NCAM1自己抗体のCell-based assay。NCAM1を発現する細胞（緑）に統合失調症患者の血清（赤）が反応している。

遺伝子を背景にした分子病態にまで研究ターゲットを広げる

「それでも、自己抗体だけでは、統合失調症の全ての病態はやはり解決しません」

塩飽テニュアトラック准教授は、さらに先を見据えている。統合失調症はさまざまなリスクの遺伝子を背景に発症することが指摘されている。統合失調症は、思春期や青年期に発症することが多く、環境やストレスの関与も想定されるが、それらだけで発症するほど単純な病態ではない。心理的な「心の病気」というよりは、明確に「脳の疾患」である。

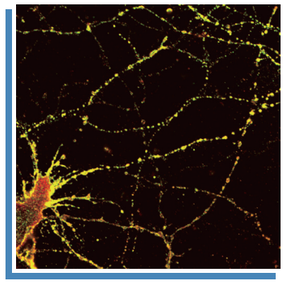
「その観点では、基本的な病態アプローチ手法は神経細胞生物学的なもので良いはずです。環境やストレスが引き起こす脳の変化も分子の言葉に置き換えられます。自己抗体が産生されるのも、感染症など『環境』を背景にするかもしれませんし、遺伝子変異が背景になる可能性もあります」

塩飽テニュアトラック准教授は精神疾患においても分子生物学的な病態研究が重要だという。これまで統合失調症の研究では、薬理学的なモデルや遺伝子改変動物によるモデルマウスが使用されてきた。

「近年のゲノム研究の進展で、統合失調症のモデル動物を使用した研究はさらに進むと思います。そのようなモデルと共に、患者さんの情報を統合して、治療や診断に還元できる研究を行っていくことが重要です」

2022年10月にテニュアトラック制度で採用された塩飽テニュアトラック准教授は、統合失調症の自己抗体病態に加えて、自己抗体に起因しない難治性の分子病態にまでターゲットを広げ、病態の解明と新たな治療戦略につなげていくことを目標にしている。

「精神疾患も他の医学領域と同様に分子病態を明らかにすることで、新しい治療ターゲットが明らかになります。テニュアトラック教員として後進の育成にも取り組みながら、難治性精神疾患の病態解明と治療法の開発に尽力してまいります」



神経細胞のNCAM1（緑）とそれに結合する抗NCAM1自己抗体（赤）の重ね合わせ（黄）。

Breakthrough
次世代の開拓者

「両親の生活習慣で子は変わる」胎盤を生体情報伝達器官と定義した新規の胎盤制御性遺伝機構の実証へ

大学院医歯学総合研究科
生体情報継承学分野
テニュアトラック准教授
楠山 譲二

くすやま・じょうじ
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科助教、ハーバード大学医学部附属ジョスリン糖尿病センター研究員、東北大学学際科学フロンティア研究所助教などを経て2022年より現職。

胎盤から分泌されるタンパク質が母親から子への情報伝達因子であることを同定

妊娠中の母親が太っていると、生まれてきた子は通常の生活習慣を送っているにもかかわらず、肥満や糖尿病になりやすくなってしまう。親から子への疾病リスクの伝播は、世代を跨いだ健康格差を引き起こす重大課題である。そこで実践的な予防方策の確立を目指して、妊娠期のみに形成される特徴的臓器である「胎盤」の役割に注目し、胎盤機能を評価し利用する胎盤医学の実現に挑んでいるのが、新設の生体情報継承学分野の楠山譲二テニュアトラック准教授である。

「私が鹿児島大学歯学部で研究を始めた最初のテーマは、機械的な刺激（メカニカルストレス）が細胞の分化や炎症応答に与える影響でした。研究の進展により、細胞レベルにおけるメカニカルストレスの多彩な役割が分かってきて、次第に、より全身へのダイナミックな作用に興味を持つようになりました。そこで、ハーバード大学医学部附属ジョスリン糖尿病センターに留学し、生体におけるメカニカルストレスの統合点である運動へと研究テーマを変えました。運動学は門外漢でしたが、自分の強みを生かしながら好奇心を持って挑戦できるプロジェクトとして選んだのが『妊娠期の運動効果の子への次世代伝播機構』でした」

楠山テニュアトラック准教授は留学中、運動した妊娠マウスの血中には、母体の運動効果を子へ伝達する物質が存在することを見つけ、それが胎盤から分泌されるタンパク質（SOD3）であることをマウスとヒトによる実験で同定した。帰国後は東北大学学際科学フロンティア研究所に着任し、妊娠時運動における胎盤機能の研究を継続した。

「運動刺激が体中の臓器に作用することはよく知られていましたが、胎盤も運動に応答する臓器であるという発想は今までになく、自分自身も発見時は非常に驚きました。この研究をきっかけに、胎盤が母体環境を子に伝播する情報インターフェイスであるという仮説を想起し、より広い視点から胎盤の役割を再考しています」

胎盤に集約された運動情報が現世代や次世代にどう伝わるのかを解析し、母親の運動が孫の代にも良い影響を与えることも論文で発表した楠山テニュアトラック准教授。これまでの実験によると、妊婦の運動に適した時期は胎盤の形成がスタートし産科学的に安定期と言われる妊娠14～15週以降。効果的な運動方法については、多くの妊婦に協力してもらいながら手軽に評価できるデバイスやパラメーターを模索しているという。

両親の生活習慣が子に及ぼす影響にも着目 歯科分野の研究も視野に入れる

現在は母親の運動だけでなく、父親の運動が子に与える影響についても研究を進めている。胎盤は受精卵から発生するため、母親の卵子や母体だけでなく、父親の精子からの情報も胎盤に作用すると考えられるからだ。さらに両親の運動以外の生活習慣にも着目し、胎盤が子に伝える情報の全容解明を進めている。

また、運動や生活習慣の次世代伝達メカニズムを実証しながら、その成果を実装させていくことが肝要であると考える楠山テニュアトラック准教授は、運動を社会政策やライフスタイルにいかに組み込むことができるかが非常に重要だと話す。

「海外でさまざまな妊婦を対象に運動量とSOD3のレベルを測ったところ、例えばカナダでは運動している人としていない人がはっきりしていて、運動量とSOD3の量に強い相関があり、マウス研究の成果をヒトで実証することができました。ところがデンマークの研究では妊婦は、妊娠中の運動量が高い人ばかりで、大部分が高いSOD3レベルを示していました。これはデンマークでは出産前後の休暇が短く、妊娠中も継続的に働いているからだと予想されます。このことから、社会福祉の一環としてキャリアが途絶えないようにすることができれば、次世代の健康問題の解決につながる部分もあるのではないかと考えています。また、出産は両親にとって大きなライフイベントだと思いますので、それを機に少しでも健康に目を向けてもらえるようになることを期待しています」

楠山テニュアトラック准教授は2022年10月に、テニュアトラック制度で採用された。自身の研究にはヒトにおける解析や介入手法の構築が非常に重要となるため、医科と歯科に特化した強みを持つ本学で研究できることを嬉しく思っているという。

「私はもともと歯科医なので、今後は口腔の分野でも連携した研究を進めていきたいと考えています。偶然にも本学は私が歯科臨床研修を行った場所です。当時温かい指導をしてくださった先生方に研究でご恩を返せるように、そして本学に新たな息吹を届けることができるように、恵まれた環境での研究に邁進したいと思います」

Let's advance your Life & Career!

ダイバーシティ＆インクルージョンで自分らしく輝く

本学では、学長が「ダイバーシティ＆インクルージョンの推進宣言」(2020年９月)および「SDGs推進宣言」(2021年６月)を表明し、持続可能な未来を拓くための取り組みを積極的に行っています。

ダイバーシティ・インクルージョン室とは

学内の皆様が出産・育児、介護、療養などさまざまなライフステージと、学業・研究・仕事が両立できる環境の整備に取り組んでいます。
また、キャリアカウンセラーによる相談室も開設。カウンセリングや各種セミナーの開催などを通し、持続的なキャリア形成を支援するとともに、ダイバーシティ推進に関する意識啓発活動に取り組んでいます。

TMDU 10の取り組み

① 女性上位職登用制度
② ファミリーサポート
③ 派遣型病児保育
④ 保育支援事業
⑤ 研究支援員配備事業
⑥ 共同研究支援事業
⑦ キャリア支援事業
⑧ 介護支援事業
⑨ 研究力強化事業
⑩ ダイバーシティ推進事業

CLOSE UP!

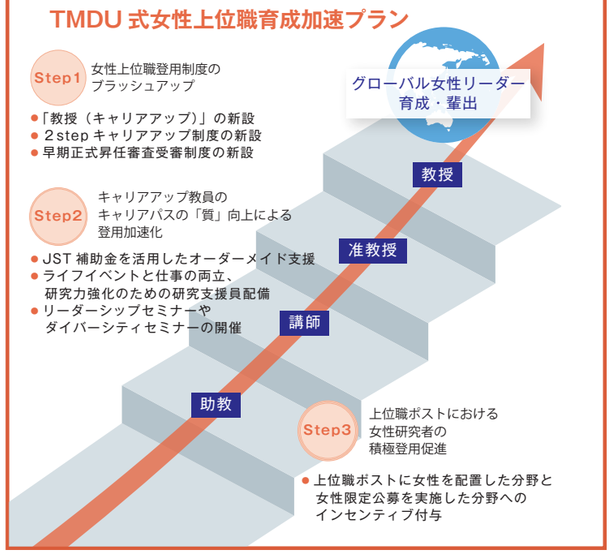
女性上位職登用制度とは？

教育・研究・診療の領域で特筆すべき業績があり、将来の活躍が期待される女性教員を「キャリアアップ教員」として登用します。

制度内容

「キャリアアップ教員」として登用された場合、３年の任期中、ダイバーシティ推進の役割を担いながら、リーダーシップ強化や研究支援員の配備などの支援を受けられます。そして、業績に基づいた審査を経て、教授・准教授などへの正式昇任が可能となります。
なお、登用者が所属する分野の長は、キャリアアップ教員の支援・指導を積極的に行い、正式昇任への道筋を拓くためのサポートに取り組みます。

TMDU 式女性上位職育成加速プラン



ダイバーシティ・
インクルージョン室について
詳しくはこちらから

歯周病学分野
片桐（かたぎり） さやか 准教授（キャリアアップ）

ハーバード大学医学部附属ジョスリン糖尿病センター博士研究員、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯周病学分野助教、講師などを経て2021年より現職。

学生の指導および外来診療に加え チーム一丸となって研究に取り組む

歯周病学分野を目指したきっかけは、学部学生時代の研究体験実習です。臨床講座にいながらも細菌を扱い、分子生物学的なことに触れさせてもらえたことで興味を持つようになりました。

現在、学生の模型実習や患者さんの診療の指導を行い、自身も外来で臨床をしています。歯周病は歯磨きの際の磨き残しが原因なので、患者さん側の協力なしに治すことはできません。歯科医師は歯の汚れが固まってできた歯石を取る治療を行いますが、それでも、その後の患者さんのお手入れが必要です。ですから、私たちの指導やアドバイスを患者さんに守っていただき、歯の状態が良くなられたときには歯科医師としての充実感があります。

また、大学院生やポスドクと８人程度のチームで研究を進めています。歯周病は、口の中の細菌叢のバランスが崩れ、悪い菌が多くなることで腫れて悪化し、最終的には骨が溶けて歯が抜けてしまう病気です。それが糖尿病や早産にも影響すると言われていることから口腔内の細菌叢に注目し、全身の疾患との関わりについて追究しています。新しい発見があったときの喜びはもちろんですが、チームのメンバーは皆外来業務も行っているため、限られた時間の中でお互いにサポートし合っており、チーム一丸となって研究に取り組める今の環境にとても満足しています。

成果や実績が客観的に評価される 女性上位職登用制度に申請

女性上位職登用制度に申請したのは、性別や出身といった個人的な枠組みにとらわれず、臨床および研究、教育の成果や実績が客観的に評価されることに魅力を感じたからです。また、私が研鑽期間後の評価で准教授として正式に昇任できれば、分野の教員枠に空きが出ます。それによって別の人がポストに就けるチャンスが生まれ、分野にも貢献できるのではないかと思いました。

キャリアアップ教員に就いたことで、研究費の申請を上位職でできるようになったことが特に良かったと感じています。また、研究支援員配備やオーダーメイド支援などを受ける機会があることも利点として挙げられます。一方、周囲には介護や育児などプライベートな制約によって業務に専念できる時間を十分に確保できない人もいます。その人たちの時間的制約を緩和するシステムがさらに拡充され、より多くの人がキャリアアップを目指せるようになることを期待しています。

今後は、口腔の健康を通して全身の健康に寄与できる研究を行い、臨床にも尽力していきたいと考えています。そして私がこれまで多くの先生方にしていただいたように、研究や臨床の楽しさややりがいを学生たちに伝えていきたいと思います。学生の夢に対するチャレンジを、固定観念にとらわれずにサポートできるリーダーを目指します。

Graduate&Student

『この場所から、新しい未来へ』

社会で活躍する東京医科歯科大学の卒業生と、学生が語り合う対談コーナー。

今回は、大学卒業後に口腔外科を専攻し、現在は国内外で解剖学者として活躍している

先輩が、歯学部の後輩に向けてエールを送ります。

命に関わる部分に触れた経験が医療人としての礎につながる

松村 僕は、将来の分野として口腔外科に興味があります。岩永先生が口腔外科を学ぶようになられた経緯を教えてください。

岩永 大学を卒業して2年間、福岡県の久留米大学病院で口腔外科の臨床研修を行った後、地元の佐賀で父親が開業していた歯科医院を継ぎました。しかし、どうしても口腔外科に対する強い思いを断ち切ることができず、再び久留米大学に戻って勉強を続けさせてもらいました。

松村 開業している歯科医院で診療を行いながら大学で口腔外科を勉強するのは大変なことが想像できます。モチベーションは続いたのでしょうか。

岩永 自らの意志で口腔外科を勉強したいと思って大学に戻ったわけですから、何があっても絶対に自分で責任を取ろうと心に誓っていました。だからこそ、どんなことでも乗り越えられたのだと思います。それから10年以上経ちますが、その気持ちは今も変わっていません。

松村 確か2年生のときだったと思いますが、早期臨床実習で荏原病院に見学に行った際、白板症の生検に出すためのオペを見学させていただき、不安そうな患者さんに優しく接している歯科医師の先生方の姿を見て憧れを抱きました。また、口腔外科は歯科の中でも特に命に密接した分野なので、一人でも多くの患者さんを救うことができればと思い、口腔外科の道を考え始めました。先生が口腔外科を選択して良かったと思うことは何ですか。

岩永 久留米大学病院での臨床研修では、命に関わるような重い疾患のある患者さんと日常的に接する経験から、口腔外科は歯科でありながら医科と全く変わらない世界なんだなと強く感じました。また、人の生死に関わる仕事をすることで、私の医療人としての礎ができあがったと思っています。口腔外科は、歯科医師でありながら人の命と向き合うという意味では、非常にやりがいのある分野だと思っています。

歯学部歯学科５年生

松村 勇佑 Yusuke Matsumura

福岡県生まれ。実家は祖父が開業して間もなく50周年を迎える松村歯科医院。父親も兄も歯科医師という環境の中で育ち、自然と同じ道を目指すようになる。岩永譲教授の本学就任後初となった講義「頭頸部臨床解剖」を興味深く受講。将来は口腔外科医として海外で活躍することを視野に入れている。

松村 僕も、命に関わることに近い処置を行う口腔外科は社会的意義が非常に大きいと感じています。さまざまな処置のベースとなる手技が身につくことからも、口腔外科に進んで歯科医師としての基礎を身につけようと思います。

たとえハードルは多くても海外で歯学の理解を深めたい

松村 日本にはない考え方を取り入れたいという理由から、海外での経験を積みたいと考えています。日本においても歯学はかなり発展していますが、海外で生まれた臨床システムも多いので、現地で学ぶことによって深い理解につながると思っています。先生はなぜ海外へ行こうと思われたのですか。

岩永 アメリカから戻られた解剖学の先輩に「君もチャンスがあれば是非海外に行った方が良い」と言われたことが大きかったですね。その言葉に背中を押されて留学し、当初は解剖学の研究をしていたのですが、決して口腔外科医になることを諦めていたわけではなく、2年間で帰国するつもりでした。ところが半年くらいたつと毎日の研究が楽し過ぎて、それまでのライフプランが全て変わってしまったんです。

松村 海外へ行って良かったと思ったことは何ですか。

岩永 ずっと医学部の医師と仕事をしてきたので、仕事の幅が広がりました。またアメリカはドクターとしての業務が決まっているので、自分が本当にしたいことに集中できるのは、あの国の強みだと思いますね。

松村 反対に大変だったことはありますか。

岩永 英語ですね。日本にいたときから論文を通して読み書きを中心に自分の専門領域に関する英語は比較的勉強していたのですが、いざ渡米すると、会話には本当に苦労しました。ですから、若いうちに海外にショートステイして、自分の英語力や今後必要なスキルを認識し、磨いておくと良いと思います。

松村 言語の問題や働き方などは日本と異なる点があり、越えなければならないハードルは多いと思いますが、それ以上のメリットがあることが分かりました。今回、さらに海外への思いが強まりました。

自身の可能性を広げるためにさまざまな人と会ってほしい

松村 研修を終えたら大学院に進学したいと考えているのですが、口腔外科に進むためにはどの分野を選べば良いと思われますか。

岩永 本学の口腔外科であれば、顎顔面外科学分野または顎口腔腫瘍外科学分野になると思います。私が今後、大学院生の受け入れを考えている口腔顎顔面解剖学分野も良いですし、他大学の研究室に進むのもありだと思います。また、口腔外科でがんの治療を行うときは必ず病理学が関わってきますし、分野を超えて関連する領域を研究しておくのも良いかもしれませんね。

松村 学生時代に、これだけはやっておくべきだということはありますか。

岩永 自分がしたいことや夢、というものは、自分が知っていることからしか絶対に生まれてこないと思うんです。ですから、医療分野に限らず、さまざまな人と積極的に会い、話をして、どんどん知識や興味の幅を広げていってほしいと思います。

松村 もし僕がアメリカにいる先生を訪ねたら会ってもらえますか?

岩永 喜んで！ そのときはスケジュールを空けておきますので、どうぞいらしてください。

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 口腔顎顔面解剖学分野 教授

岩永 譲 Joe Iwanaga

2007年東京医科歯科大学歯学部卒業。2009年岩永歯科医院院長、2011年久留米大学医学部歯科口腔医療センター助教、2013年同大学医学部解剖学講座 肉眼・臨床解剖部門兼務、2016年Seattle Science Foundation、2019年Department of Neurosurgery, Tulane University School of Medicineに所属し、2022年7月より現職と兼務。

東京医科歯科大学基金 寄附者芳名録

未来の医療人育成に向けた募金にご支援をいただいた皆様のご芳名を掲載いたします。
今後とも引き続き、東京医科歯科大学へのご寄附・ご支援を、お願いいたします。

■ 2021年12月1日から2022年8月31日の寄附者を掲載しています（50音順／敬称略）。 ■ 匿名を希望された方については、掲載しておりません。

新たに銘板に掲載された方のご芳名

MISSION BLUE プレート（1億円以上）
該当なし

BLOOM GOLD プレート（3000万円以上）
該当なし

ピンクゴールドプレート（1000万円以上）
該当なし

プラチナプレート（500万円以上）
社会医療法人社団 慈生会
理事長　伊藤 雅史

株式会社　山一建販

シルバープレート（100万円以上）
青木 澄夫
今井 裕三
佐々木 純一
佐々木 宏治
濱田 和家
渡邉 和子
医療法人社団隆心会 辻林内科 辻林 隆
一般財団法人　和同会

ブロンズプレート（30万円以上）
姉川 将大
飯島 豊彦
大橋 隆宏
木村 秀明
小林 章浩
柴田 一乃
清水 真
杉村 日向子
髙橋 英恒
竹内 信一
津村 知子
中尾 清孝
永見 明生
奈良 雅之
野村 丈夫
原茂 太一
前川 喜平
前田 祥輝
森本 秀昭
第70回お茶の水祭実行委員会

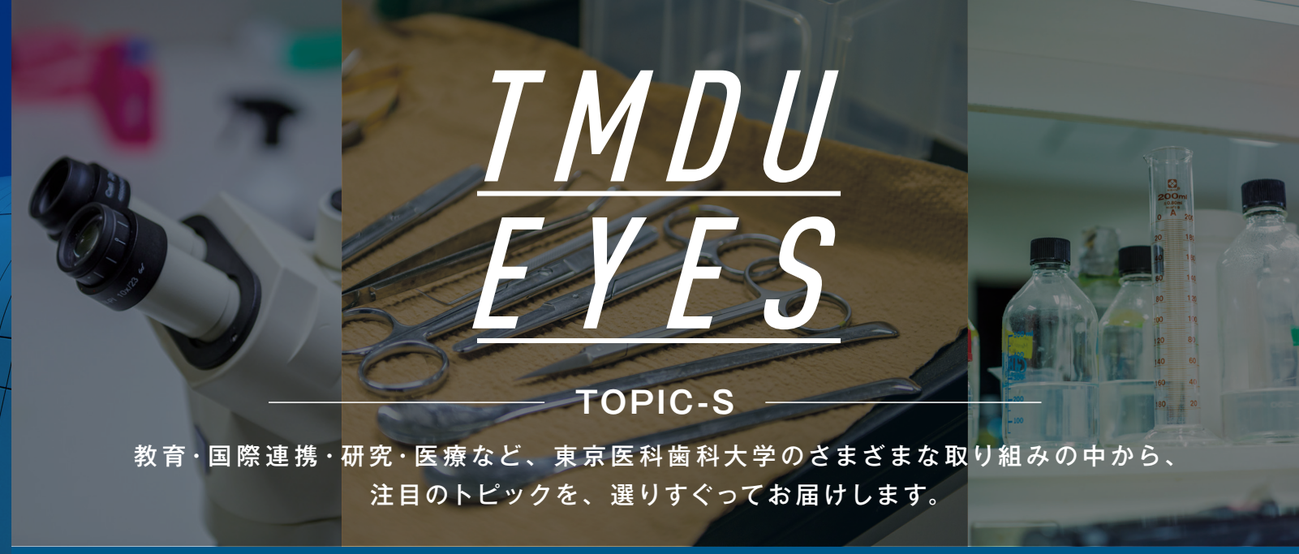
▲ご芳名録のみのご掲載の方は、ホームページにて掲載しております。

未来の医療人育成に向けたご支援のお願い

本学は病気やケガに苦しむ人を一人でも多く救うため、さまざまな病気に対する治療法や治療薬の開発につながる研究および、世界中で活躍できる医療人の育成に尽力しています。これらの人材育成や研究活動を支えるご寄附および基金を企業や個人の皆様に募っております。医療の発展のために、皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

東京医科歯科大学基金
東京医科歯科大学募金室
www.tmd.ac.jp/kikin/
TEL：03-5803-5068
MAIL：bokin.adm@tmd.ac.jp

※金額は個人、法人ともに累計。　※対象期間以前に、既に銘板に記載されている方は含みません。



TMDU EYES

TOPIC-S

教育・国際連携・研究・医療など、東京医科歯科大学のさまざまな取り組みの中から、注目のトピックを、選りすぐってお届けします。

令和4年度 知財功労賞 経済産業大臣表彰（オープンイノベーション推進企業）を受賞

「知財功労賞」は、日本の知的財産権制度の発展・普及・啓発に貢献した個人および知的財産権制度を積極的に活用した企業などに贈呈され、本学は経済産業大臣表彰（オープンイノベーション推進企業）において受賞しました。

本学のオープンイノベーション活動は、特許を中心とした知的財産に重点を置きつつ、研究力や教育力、研究・臨床現場およびそこから得られる医療情報などの知的財産も含め活用しており、大学全体の経営方針や戦略に基づき学長直轄の組織が推進しています。この受賞を励みに、多様な業種・業界の企業・スタートアップ、行政、他大学などとの連携を強化することで、新たな価値創造に向けてオープンイノベーション創出活動に取り組んでまいります。

東京医科歯科大学・チリ大学共同シンポジウムを開催

チリには本学の海外拠点があり、チリ大学と長年にわたり学生・研究者などの交流、育成に取り組んでおります。この度の共同シンポジウムは、幅広い分野における両大学間の将来的な連携強化を目指し、相互人材交流を目的として開催され、両大学の得意とする領域、関心が高い領域における研究について相互に発表しました。田中学長とチリ大学オライアン医学部長との昼食会も開催され、両大学の現状の紹介と、さらなる連携の拡大に向けた積極的な意見交換が行われました。

今後より一層、チリ大学と本学の間で多岐にわたる交流が活発化し、双方の人材育成がさらに促進されることが期待されます。

「研究者・学生の交流の会（Meetup）」を開催

「研究者・学生の交流の会（Meetup）」は学生や若手・ベテラン研究者が隔てなく異分野の研究者と情報交換し、親睦を深めることを目的として、統合研究機構内に設置されたYISC（若手研究者支援センター）が企画したものです。新たなネットワーク作り、研究情報交換などによる交流によって、新たな共同研究の芽が生まれ、大きなイノベーションに発展することが期待されます。

全4回が企画され、重点研究領域公募班採択者および第4期次世代研究者育成ユニット採択者らによる交流会、若手研究者とTIP（TMDUイノベーションパーク）会員らによるディスカッション、東京工業大学未来産業技術研究所との研究交流会などが開催されました。今後も、毎月第4水曜日に開催予定です。